

静岡県試験研究 10 大トピックス（農林技術研究所）

<p>タイトル</p>	<p>I P M（総合的病害虫管理）によるネギ類の安定生産技術の開発</p>	<p>研究課題名 期間</p>	<p>I P M（総合的病害虫管理）によるネギ属作物の安定生産技術の開発（H24～H27） ほ場の健康診断に対応したネギ病害虫予防的管理技術の開発（H28～H30）</p>
<p>所属</p>	<p>農林技術研究所 植物保護・環境保全科</p>	<p>補職名 研究者名 問合せ先</p>	<p>上席研究員 土井 誠 0538-36-1556</p>
<p>研究概要</p>	<p>〔背景・ねらい〕 近年、ネギ類では化学農薬に抵抗性を持ち、薬剤による防除が難しいネギアザミウマが大きな問題となっている。一方、ネギ畑ではネギアザミウマの有力な土着天敵であるクモ類やヒメオオメカメムシ等が確認され、これらを有効活用する防除が望まれている。</p> <p>〔成果の内容・特徴〕 秋冬作根深ネギ栽培において、ネギ定植前後からムギ類をうねの間に作付けて土着天敵を保護・強化し、土着天敵に影響が少ない殺虫剤と組み合わせて防除することで、化学農薬を減らしても慣行と同程度にネギアザミウマ等の害虫を抑制できる。</p> <p>（1）5～6月定植の秋冬作の根深ネギ畑で、ムギ類を間作すると土着天敵のヒメオオメカメムシとコモリグモ類が増加する。</p> <p>（2）ネギほ場のヒメオオメカメムシとコモリグモ類からネギアザミウマDNAが検出されたことから、これらは天敵としてネギアザミウマの密度抑制に貢献していることが判明した。</p> <p>（3）ヒメオオメカメムシとコモリグモ類は県内主要産地に広く分布している。</p> <p>（4）これら土着天敵に対する農薬の影響を調査し、ネギ圃場で土着天敵と併用可能な選択性農薬を明らかにした。</p> <p>（5）間作ムギにはリビングマルチ用オオムギ品種‘百万石’が適している。本品種は、6月上旬までに播種すると、ネギの土寄せ等の作業をする8月末までには枯死するため、ネギの栽培に支障がない。</p> <p>（6）ムギ間作と選択性農薬の組み合わせによる防除体系により殺虫剤使用回数を慣行の半分程度に減らしても慣行と同等の防除効果が得られる。</p> <p>（7）根深ネギ以外の葉ネギにおいても、赤色防虫ネット等の化学農薬のみに頼らない防除体系の開発に取り組んでいる。</p> <p>〔成果の活用・留意点〕 （1）本技術に適する根深ネギの作型は、ムギの生育・枯死および土着天敵発生の観点から5～6月定植の秋冬作である。</p> <p>（2）静岡県の農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準に掲載して普及を推進している。</p> <p>（3）国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構のホームページで本内容を取りまとめた「土着天敵を活用する害虫管理 最新技術集 / 土着天敵を活用する害虫管理技術 事例集」を公開している。</p>		

様式 2



害虫ネギアザミウマ（雌成虫 体長約 1.5mm）



土着天敵 ヒメオオメカメムシ成虫（左：雄、右：雌 体長約 3mm）



土着天敵 ウツキコモリグモ
（左：腹部に幼体を背負った雌成体、右：幼体）



オオムギ播種 7日後（6月5日）



オオムギ播種 63日後（7月31日）
繁茂ピーク



オオムギ播種 90日後（8月27日）完全に枯死



オオムギ播種 97日後（9月3日）土寄せ後

オオムギを間作をした根深ネギ圃場の様子（オオムギを5月29日に一畝おきに播種）